

---

## 谷崎潤一郎『人魚の嘆き』『病蓐の幻想』挿絵に関する一考察

佐伯百々子(清泉女子大学)

---

1917(大正6)年に出版された谷崎潤一郎の短編集『人魚の嘆き』には、6篇の短編が収録され、そのなかの4篇に挿絵が付けられている。本書の装丁・挿絵画家に関して、決定的な証拠が少ないまま議論が展開されてきたが、現在では挿絵画家の名越国三郎(1882/83-?)が手掛けたと考えられている。書誌学研究者の川島幸希によると、『人魚の嘆き』出版前年の1916(大正5)年に、谷崎から日本画家の本間国雄(1889-1973)宛に装丁を依頼する旨の書簡が存在するというが、画風の点から明らかに本間の手によるものではない。谷崎は当初、本間に装幀もしくは挿絵を依頼したが、何らかの理由により名越が挿絵を手掛け、出版されたと考えられる。

しかし、本書中の挿絵全4作品のうち、明らかに創作版画家・恩地孝四郎(1891-1955)の作品と考えられるものが存在する。短編「病蓐の幻想」の挿絵は、恩地の初期作品《裸形の苦しみⅢ》と《愚人願求》、そして太陽を思わせるモチーフで構成されている。この作品は、恩地が東京美術学校時代に発行していた版画雑誌『月映』第Ⅲ号に収録されたものである。太陽のモチーフは同誌に収録された田中恭吉の作品に類似しており、同時期に発表した作品を組みあわせているという点からも恩地本人が手掛けた可能性が高い。恩地作品と「病蓐の幻想」挿絵の画風の類似についての先行研究はほとんど存在しないが、日本近代文学研究者の木股知史は恩地の作品である可能性を指摘している。

谷崎は自著の装丁に強いこだわりを持っていたことで知られるが、のちに発表した随筆「装幀漫談」(1933[昭和8]年)のなかで、若い頃は人任せにしていたと述べており、本間や名越に依頼した後は、画家たちにすべてを一任していた可能性が高い。そのため、谷崎から直接依頼を受けた本間、もしくはそれを引き継ぐこととなった名越が恩地に「病蓐の幻想」挿絵制作を依頼したことが想定される。

本間国雄は1905(明治38)年に白馬会に入会、その後1912(大正元)年にフェウザン会に入っており、恩地も同時期に両会に所属していた。両者は白馬会では同じ原町研究所に所属し、フェウザン会では本間が作品を出品した展覧会を恩地が見に行っている。両会で本間と恩地の接触があり、のちに『人魚の嘆き』の挿絵を依頼した可能性がある。また、名越と恩地は、それぞれ画集や雑誌を出版している出版社洛陽堂を介して接点があった可能性も高い。それ以前にも「第1回夢二作品展覧会」を当時名越が所属していた毎日新聞が取り上げているが、この展覧会には恩地も同行し会場で夢二の手伝いをしていたため、そこで名越と恩地が出会っていることも考えられる。

本発表では、以上を踏まえて『人魚の嘆き』『病蓐の幻想』挿絵が恩地の作品であることを明らかにしたい。